

フリウリ語の「人称代名詞付き前置詞」または前置詞と人称代名詞の融合 Preposizioni pronominalizzate ossia pronomi messi in enclisi ad alcune preposizioni in friulano

山本真司

Shinji YAMAMOTO

1. はじめに 前置詞は、意味・機能の点でその目的語と密接に結びついているため、発音の上でも、前置詞とその後続の語（目的語句あるいはその一部）が密接に結びついたり、あるいは、さらに進んで音の融合を起こしたりする現象が、いろいろな言語で見られることは頷ける。例えば、単音節の前置詞は多くの場合無強勢の後接語 *proclitico*¹⁾ として扱われること、また、多くのロマンス諸語に見られるように、前置詞と冠詞が縮約を起こすことなど、である。

本稿で取り上げるのは、広い意味ではそのような前置詞とその目的語との結びつきの一形態であると言えるかもしれないが、ロマンス諸語では比較的類例が少ないと思われる、やや風変わりな現象である。それは、フリウリ語²⁾において、前置詞の末尾に、その意味上の目的語をなす人称代名詞が前接語 *enclitico* として付加され、一つの語となってしまうというものである。

2. *intorsi* および *daûrsi* 具体例を挙げて説明しよう。フリウリ語辞書「新ピローナ」Nuovo Pirona (以下「NP」とする) p. 466 は、*intôr* 「まわりに」「*intorno, addosso*」³⁾ という語（ただし標準化正書法では *intor*⁴⁾ と表記する）を記載している。この語は、副詞また二次的な前置詞（いわゆる非本質的前置詞 *preposizioni improprie*）として使われる。前置詞として目的語を従える時には、つなぎの語として前置詞 *di* を介在させるか（用例 (1) (2)）、あるいは、意味上の目的語を与格の人称代名詞の形にして動詞に接語として添える構文（用例 (3) (4)）— もっともこのようなケースでは、前置詞と呼んでいいかは分からないが⁵⁾ — を用いる。場所的な「の周囲に」という概念のほか、そこから発展して「身に・体に（着けている、持っている）、身から・体から（着脱する）」のような、身体への付属・付着をも表わす。

(1) O ài fat un zîr *intôr de braide*. 「畑のまわりを一回りした」(NP, p. 466)⁶⁾

(2) No ài un centesim *intôr di* me. 「私は1セントも持ち合わせていない」(NP, p. 466)

(3) Po al riviesti Aron cu la tonie, j metè *intôr la cinturie*. (「フリウリ語オンライン聖書」⁷⁾ - 以下「オンライン聖書」とする - Lv 8, 7) 「アロンに衣を着せ、彼の身に帯をつけた」

(4) E jè cheste la munture sacre ch' al varà di metisi *intôr* dopo di jessisi lavât cu l' aghe. (「オンライン聖書」Lv 16, 4) 「これが、彼が、体を洗い清めた後に身に付けねばならない聖なる装備である」

この *intor* に再帰代名詞3人称与格接語形 *si* をつけて形成された *intorsi* という語（ただし標準化正書法では *intorsi* と表記）は、「自分自身の周りに、自分自身の身に」「*intorno a sè, addosso*」(NP, pp. 466, 467) という意味を表わす（用例はいずれも「オンライン聖書」より）。

- (5) Gjonate si gjavà la manteline ch' al veve *intòrsi* e j e dè a David (1 Sam 18, 4)
「ヨナタンは身にまとっていた上着を脱いでダヴィデに与えた」
- (6) Al lavarà il so cuarp ta l' aghe tun lûc sant, al *metarà intòrsi* i siei vistîz (Lv 16, 24)
「彼は身を聖なる場所において水で洗い、自分の服を身に着けるだろう」
- (7) cheste aghe mare, ch' e à *intòrsi* la maludizion (Nm 5, 19) 「呪いを帯びているこの苦い水」
- (8) Tal to ream al è un om ch' al à *intòrsi* il spirt dai dius sanz. (Dn 5, 11)
「あなたの王国には、聖なる神々の霊を身に帯びている人がある」

もう一つ別の前置詞の例を挙げよう。daûr 「うしろに」 “dietro” (NP, pp. 226, 227) という語である。この語もまた、副詞また非本質的前置詞として使われ、intor の場合と同様に、前置詞として目的語を従える時には、つなぎの語として前置詞 di を介在させるか (用例 (9)), あるいは、意味上の目的語を与格の人称代名詞の形にして動詞に接語として添える構文 (用例 (10) (11)) を用いる。場所的な「後ろに」という概念のほか、そこから発展して、追従関係「自分の後ろに (連れていく, 従えている)」や携帯「自分の後ろに (携えて)」の意味をも表わす (用例はいずれも「オンライン聖書」から引用)。

- (9) Vignît *daûr di me* e jo us farai diventâ pescjadôrs di oms. (Mc 1, 17)
「私の後について来なさい、あなたたちを人を漁る漁師としてあげよう」
- (10) Lait indenant vuâtris, che jo us ven *daûr*. (1Sam 25, 19)
「君たちが先に行きなさい、私は君たちのあとをついていくから」
- (11) biel che âtris barcjs j levin *daûr*. (Mc 4, 36) 「その間、他の舟が彼のあとをついていった」

この daûr に、再帰代名詞 3 人称与格接語形の si が付加されて daûrsi 「自分自身の後ろに」 “dietro a sè” (NP, p. 227) という形 (ただし標準化正書法では daûrsi と表記) が作られる (用例は引き続き「オンライン聖書」から引用)。

- (12) Gjesù al *cjolè daûrsi* Pieri, Zuan e Jacum (Mc 9, 2) 「イエスは、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて」
- (13) Mosè al *puartà daûrsi* ancje i vues di Josef (Es 13, 19)
「モーセはヨセフの遺骨も共に持って行った」

3. 使用範囲 まずは intorsi, daûrsi と再帰代名詞 si がついた形を取り上げたが、ほかにも、intor, daûr に (再帰・非再帰を問わず) 他の様々な人称の代名詞を付した形が存在する (なお、それらの代名詞は、その理由はさておき、与格接語形と同じ形をしている)。ナッツィ G Nazzi の文法書 (Nazzi 1977, p. 81) が載せている用例の一部を下記に挙げておく。

- (14) Anin *daurmi*. 「さあ私のあとについて来なさい」 (-mi は人称代名詞 1 人称単数与格接語形)
- (15) O sin vignîz *daurti*. 「私たちはあなたの後についてきた」
(-ti は人称代名詞 2 人称単数与格接語形)
- (16) Al jere simpri cui fradis *daurj*. 「彼は彼についてきた兄弟たちと常にいっしょだった」
(-j [標準化正書法では -ji] ⁹⁾ は人称代名詞 3 人称単数与格接語形)

(17) Si invie viârs Romans tirant il mus daursi. 「ラバを引き連れてロマンス村へ向かう」

(18) Ju vevin strišinâz dauriur. 「彼らはそれらを彼らの後ろに引きずってきていた」

(-ur は人称代名詞 3 人称複数与格接語形) [ただし *dauriur* は標準化正書法では *daûrjur* と表記]⁹⁾

(19) No tu as nancje un centesim intorti. 「お前は一銭も持ち合わせていないのか！」

これらの形は、(あたかも人称変化のごとく) 1つのパラダイムにまとめることさえできそうに見える。フリウリ語文法の慣用では、このような前置詞と人称代名詞の結合形に特に決まった名称は付いていないようだが、とりあえず本稿では「人称代名詞付き前置詞」略して「代名詞付き前置詞」と呼ぶことにする。

ただし、どの人称の代名詞がどのような前置詞と組み合わせることができるのかについて、辞書・文法書の記述は相互に一致していない。

「新ピローナ」は、*intòrsi* (別形として *intorsit* も)、*daûrsi* に加えて、*intòrmi* “*intorno a me*”, “*addosso a me*” を avv. 「副詞」として見出し語に挙げている (NP, p. 466)。また、見出し語にはないが、*intòrsi* の説明の本文の中に *dauriur* を載せている (ただし用例は添えられていない)。

マルケッティ G Marchetti の文法書 (Marchetti 1952, p. 138) は、*daûr* “*dietro*” と *intôr* “*intorno*” には単数人称の人称代名詞与格形を前接できるとし、*daûrmi* “*dietro a me*” / *daûrti* “*dietro a te*” / *daûrsi* “*dietro a sè*”, および *intòrmi* “*addosso a me*” / *intòrti* “*addosso a te*” / *intòrsi* “*addosso a sè*” のようなパラダイムを設定している (ただし文例は載せていない)。また、パラダイム外に、注記として、*daûrj* “*dietro a lui o a lei*”, *dauriur* を挙げている。

ナツィイ (前掲書, p. 81) は、*daûr*, *intôr*, *incuintri* を代名詞付き前置詞を形成できる前置詞としている。*daûr*, *intôr* については、*daurmi*, *daurti*, *daurj*, *daursi*, *dauriur* / *intormi*, *intorti*, *intorsi* を挙げているが、これらは、表記こそ異なるが、マルケッティの挙げている諸形と同じと言えよう。*incuintri* については、*mi*, *tî*, *j*, *nus*, *us*, *ur* との組み合わせを可能とするが、例文が挙げてあるのは *incuintrimi* だけである。

(20) Mê mari 'e sares vignude incuintrimi. 「私の母は私に会いに来ることになっていた」

辞書の著者としても有名なファッジニ G Faggin による文法書 (Faggin 1997, pp. 105, 106) は、*intôr* と *daûr* との組み合わせにのみ触れており、*incuintri* に関する言及は無い¹⁰⁾。*daûr* については *daûrmi*, *daûrti*, *daûrsi*, *daûrj*, *daûrmus* (-*nus* は人称代名詞 1 人称複数与格接語形), *daûrjus* (-*us* は人称代名詞 2 人称複数与格接語形)¹¹⁾, *daûrjur* の形を、*intôr* については *intòrmi*, *intòrti*, *intòrsi*, *intòrj*, *intòrmus*, *intòrjus*, *intòrjur* の形を掲げている。他の著者が取り上げていない *daûrmus*, *daûrjus* と *intòrj*, *intòrmus*, *intòrjus*, *intòrjur* の諸形 (ただし用例は添えられていない) が目を引く。

標準化正書法を定めたラムエーラ X. Lamuela の正書法概説 (Lamuela 1987) では、*incuintri* には動詞の不定詞形に前接するのと同じ形の人称代名詞の接語形を、そして *daûr*, *intor* には、動詞の命令法 1 人称複数形に前接するのと同じ形の人称代名詞の接語形を、付けることができるとしている (pp. 33, 34)。残念ながらこの記述は、あまりにも大雑把過ぎて、文字通りに受け取ることはできない。と言うのは、ラムエーラは、不定詞形の場合も、命令法 1 人称複数形の場合も、これに前接可能な代名詞として (与格と対

格の結合形なども含めて) 30 通り余りの形を挙げているが、それらすべてが代名詞付き前置詞を形成することができるのか、あるいはいくつかの限定された組み合わせだけが代名詞付き前置詞として可能なのか、明示的かつ網羅的には述べていないからである。事実、実際に挙げている代名詞付き前置詞の形は、*incuintriur*, *intorsi*, *daúrji*, *daúrjur* だけである(なお、具体的な文例は挙げていない)。そのため、細かい点に関しては、ラムエーラの記述は、あまり参考にならないと言わざるを得ない。

以上のさまざまな研究者の記述を総合して結論づけると、結局、代名詞付き前置詞の形成が可能なのは、*intor*, *daúr*, *incuintri* の3語ということになる。あくまでも参考としてだが、「オンライン聖書」におけるこれらの形の頻度数を調べてみると次の通りである。

- *intor* は、*intormi* 3 例、*intorti* 6 例、*intorsi* 53 例、*intorj* 1 例、*intormus*, *intorjus*, *intorjur* は用例なし。
- *daúr* については *daurmi* 18 例、*daurti* 10 例、*daursi* 81 例、*daurj* 105 例、*dauri* 1 例、*daurjur* 1 例、*daúrmas* と *daúrjus* は用例なし。
- *incuintri* については *incuintrimi* 3 例、*incuintrij* 8 例、*incuintriur* 3 例、*incuintriti*, *incuintrinus*, *incuintrius* は用例なし。

-nus, -(j)us の用例が見つからないことは、マルケッティの記述と合致しているようにも見えるが、あるいは偶然見つからなかっただけである可能性も否定できない。また、ナッツィやラムエーラが可能性を示唆しながら用例を載せていなかった *incuintri* による代名詞付き前置詞のうち、*incuintrij* (標準化正書法では *incuintriji*) と *incuintriur* の使用が確認されたので、見つかった実例を以下に1つずつ挙げておく。

(21) *só fie e saltà fūr incuintrij balant cun compagnament di tamburei.* (Jdt 11,34)

「見よ、彼の娘が、彼に会いに、タンバリンを鳴らして踊りながら、飛び出してきた」

(22) *Puartait daursi spese pal viaç, lait incuintriur e diseitiur* (Gs 9,11)

「旅の食料を持って、彼らに出会いに行きなさい、そして彼らに言いなさい」

4. 他の言語の場合との対照 フリウリ語の代名詞付き前置詞のような、前置詞に人称代名詞が前接されて融合してしまう現象は、ロマンス諸語にはあまり見あたらないようである。類似の例をよく知られた言語に求めると、例えば、アラビア語やヘブライ語における前置詞に代名接辞がつく例、また、アイルランド語の「前置詞的代名詞」(ミホール・オシール 2007 による名称)などが挙げられるであろう。

ただし、アイルランド語などとフリウリ語が大きく異なっているのは、フリウリ語においては、代名詞付き前置詞を形成できる前置詞は、今のところ *intor*, *daúr*, *incuintri* の3つしか見当たらない(しかも、この3つのどれもが、意味の上からも統辞論的な観点からも、基本的な前置詞とは言い難い、非本質的な前置詞である)のに対して、アイルランド語やアラビア語、ヘブライ語においては、代名詞との融合を起こす前置詞のリストは基本的で重要な前置詞の多くを含んでいるという点である。

例えば、ミホール・オシール(前掲書, pp. 322, 323)は、アイルランド語において前置詞的代名詞を形成する前置詞として、*ag* (*at*), *ar* (*on*), *as* (*out of*), *le* (*with*), *faoi* (*under*), *ó* (*from*), *do* (*to*), *de* (*from*), *i* (*in*), *idir* (*between*), *roimh* (*before*), *tri* (*through*), *chun/chuig* (*to*), を挙げている。

また、フリウリ語では、すべての人称の代名詞について代名詞付き前置詞が存在するとは必ずしも言えないことも、アイルランド語やアラビア語、ヘブライ語などとは異なっている。再びアイルランド語を例として取り上げると、ar (on) 「…に」から形成される前置詞的代名詞は、全人称にわたっており、1人称単数 *orm*, 2人称単数 *ort*, 3人称単数男性 *air*, 女性 *uirthi*, 1人称複数 *oriann*, 2人称複数 *oraibh*, 3人称複数 *orthu*, のようになる(ミホール・オシール 前掲書, pp. 322)が、上述のすべての前置詞も、同じように、全人称にわたってこのような前置詞的代名詞を持つ。

5. 資料の再検討の一例：再帰代名詞の場合 フリウリ語に、なぜ(あるいはどのようにして)代名詞付き前置詞が存在するようになったのかについては、構造上の理論的研究や、歴史的変遷を文献によってたどる試みを行なったような、詳しい研究は存在しないようである。また、フリウリ語ではなぜ代名詞付き前置詞が3つの語の系列に限られているのか、また、どの前置詞とどの人称の代名詞との組み合わせが存在するのかについて文法・辞書の記述ごとに意見が異なっているのは、方言的な変種によるのかあるいは単に見落としによるのか、話者への聞き取りを含めてさらなる調査が必要であろう。

また、既存の資料をこれまでとは違った側面から読み直すことも必要であろう。ここでは、そのような読み直しは、ささやかではあるが新たな発見へとつながった、1つの例を取り上げて解説したい。

注目したいのは、ファッジンの記述を除いて、1人称複数、2人称複数の代名詞付き前置詞が挙げられていないことである。一見すると、これは、次の表のような、この2つの人称の部分に(*intor* については3人称複数部分にも)空き間のある、不完全なパラダイムを想定させるかのように見える。

(表 1)

1人称単数	2人称単数	3人称単数	1人称複数	2人称複数	3人称複数
<i>intormi</i>	<i>intorti</i>	<i>intorji, intorsi</i>	なし	なし	なし
<i>daürmi</i>	<i>daürti</i>	<i>daürji, daürsi</i>	なし	なし	<i>daürjur</i>

ファッジンに従えば、「なし」となっている部分には、*intôrnu*, *intôrju*, *intôrjur*, *daürnu*, *daürju* などの形が立つことになる。しかし、本稿では、この「空欄」はファッジンの想定とは別の仕方では埋まる(少なくとも部分的には)ことを示したいと思う。それは、再帰代名詞の振舞いと関連している。

まず、1人称複数、2人称複数の問題に入る前に、3人称複数について見ておきたい。幾つかのロマンス諸語と同じくフリウリ語でも再帰代名詞 *si* は単数・複数の両方の機能で用いられる。ならば、文法や辞書の記述などでは特に明言されていないが、*intorsi*, *daürsi* の場合でも *si* が3人称複数を意味することがあり得ると予想できそうであり、事実、「オンライン聖書」でもそのような例が見つかる。

(23) *I vistiz benediz di Aron a passaran dopo di lui ai siei fis, che ju metaran intorsi cuanche a cjaparan*

l' unzion e la investidure. (Es 29, 29) [si は3人称複数の意味]

「アロンの祝別された服は、彼の後、彼の息子たちに受け継がれ、彼らは塗油と着衣の式を受ける時にそれらを身につけるであろう」

(23a) *a àn menât daürsi dut ce ch' a vevin, robe minude e robe grande. (Gjenesi 46, 32) [si は3人称複数]*

の意味]「彼らは、小さな物も大きな物も、所有するものすべてを、携えていった」

再帰代名詞については、さらに注目すべき点がある。次の表は、再帰動詞 *lavâsi* “lavarsi” 「自分自身の体を洗う」の直説法現在平叙形を、フリウリ語のある3つの方言で示したものである。この3つは、ある意味で、フリウリ語の再帰代名詞の体系の典型的な3つのタイプを代表しているものである。なお再帰代名詞の部分に太字で示してある。

(表2)

	1 人称単数	2 人称単数	3 人称単数	1 人称複数	2 人称複数	3 人称複数
(1)	mi lavi	ti lavis	si lave	si lavin	vi lavais または si lavais	si lavin
(2)	mi lavi	ti lavis	si lave	si lavin	si lavais	si lavin
(3)	mi lavi	si lavis	si lave	si lavin	si lavais	si lavin

フリウリ語では、ラテン語 *SĒ* に由来する再帰代名詞形は、これが3人称（単数・複数）にしか使われないイタリア語などよりも、より広い使用範囲を持っていることがわかる。しかも、(1) (2) (3) を比べると（ただし実際にこの順序で歴史的進化が進んだのかは即断できないが）その通用範囲は拡大の傾向があるとも言えそうである。(3) では、1人称単数を除く全ての人称・数で *si* が用いられるに至っている。

ちなみに、言語地理学的観点からの詳細な考察は今回は行なわないが、この3つのタイプはどれも、中部方言に属する変種の中に見出される。ごく簡単に言うと、地理的に一番広く見られるのは(2)のタイプであると考えられ、標準フリウリ語の規範もこれに従っているようである（標準フリウリ語の元となつたいわゆるフリウリ語コイネーもやはりおおむね中部方言を基としている）。¹²⁾

さて、通常の *si* の再帰代名詞としての用法がこのように1人称複数、2人称複数に及ぶことを考えると、*intorsi* や *daürsi* の場合も、このように、*si* が、1人称複数、2人称複数などを意味しているケースがあるのではないかと予測される。事実、今回調べた「オンライン聖書」のテキストの中に、そのような用例が見つかった。以下、それらの用例のうちいくつかを挙げておく。*intorsi* については：

(24) *no veis frujâz i vistiz ch' o vevis intorsi ni i sandui tai pîs.* (Dt 29, 4)

「あなたたちは、身につけていた服も、足のサンダルも、着古すことも履き古すこともなかった」[*si* は2人称複数の意]

daürsi については：

(25) *dute la int ch' a vevin daürsi* (Dt 11, 6) 「彼らが引き連れていた人々全て」[*si* は3人称複数の意]

(26) *Puartait daürsi spese pal viac* (Gs 9, 11) 「旅のための費用を携えて行け」[*si* は2人称複数の意]

先に触れた、*intornus* や *daürmus* のような形が見つからないという事実は、少なくとも部分的には（再帰的用法に関しては）それが *si* を用いた *intorsi*, *daürsi* によって表現され得る（あるいはされなければならない）という事実によって説明がつくであろう。

果たしてマルケッティなどの研究者が（少なくとも執筆の段階で）本当に表1のように考えていたかは

わからない。(intorsi, daŕsi の場合でも) si が 1 人称複数, 2 人称複数の意味で用いられることは自明のことだったので, 敢えて触れなかったのだろうか. いずれにせよ, 記述をより明快にするためにも, 表を次のように修正しよう. ただし, (ラムエーラの漠然とした言及を除けば) ファッジンだけが挙げている intôrmus, intôrjus, intôrjur, daŕmus, daŕjus の形は, 今回は実例を確認できなかったので(「オンライン聖書」での検索では, 念のために intôr- の形のみならず intor- の形も調べたが), 括弧付きで示しておく.

(表 3)

1 人称単数	2 人称単数	3 人称単数	1 人称複数	2 人称複数	3 人称複数
intormi	intorti	intorji, intorsi	intorsi, (intormus)	intorsi, (intorjus)	intorsi, (intorjur)
daŕmi	daŕti	daŕrji, daŕsi	daŕsi, (daŕmus)	daŕsi, (daŕjus)	daŕsi, daŕjur

なお, ナッツィが挙げている incuintri- については, * incuintrisi のような形は, ナッツィ自身も挙げていないし, 今回の調査でも用例を確認できなかったので, 変化表にこれを付け加えることは今は差し控える. また, ナッツィが挙げている(また標準化正書法が可能性を示唆している) incuintriti, incuintrinus, incuintrius も, 実例を確認できなかったので留保つきで扱う. すると想定される変化表は次のようになる.

(表 4)

1 人称単数	2 人称単数	3 人称単数	1 人称複数	2 人称複数	3 人称複数
incuintrimi	(incuintriti)	incuintriji	(incuintrinus)	(incuintrius)	incuintriur

6. 検討すべき問題点 そのほか, 更なる調査・考察が必要と思われる点を幾つか列挙しておく.

- ・他の構文との違い 代名詞付き前置詞の使用は, 他の方法で前置詞に目的語を伴わせる構文(つまり, つなぎの前置詞 di を介して代名詞の強形を置くものや, 代名詞の与格形を動詞に接語として添えるもの)と比べて, 意味・機能上の相違があるのか(あるいはないのか), という問題がある. 意味の違いで使い分けているのかもしれないし, また, 何らかの理由である構文を使わず, 代わりに別のタイプの構文を用いる(例えば, daŕmus を用いず daŕ di nô とするなど)ということもあるかもしれない.

- ・意味の偏り 1つの前置詞の複数の意味の中で, ある意味が特に代名詞付き前置詞を構成しやすい, ということがないかどうか — 例えば, 純然たる位置的な概念よりも所有など抽象的な意味を表す時のほうが代名詞付き前置詞の形が出現しやすい, など¹³⁾ — も調べてみる必要があるであろう.

- ・代名詞の二重使用との関係 フリウリ語には, 同一文中で, 同じ間接目的語を, 与格接語形の人称代名詞で前接と後接の 2 回繰り返して表示する現象がある¹⁴⁾ (ただしこの現象には方言差がある). 例えば, j ai diti (<dit+i) 「私は彼に言った」の「彼に」は, 動詞 ai dit- 「(私は) 言った」の前に置かれた j と, dit- に前接された -i の両方に対応する. 代名詞付き前置詞の場合にも, 同じような二重使用と思われる用例が見つかることがあるので, 出現する条件, 二重使用でない用例との意味の違いなどについて, 調査が必要であろう. 例えば, E lui, jevât sù, j lè daŕj. («オンライン聖書」Mc 2, 14) 「彼は立ち上がり彼の後をついて行った」の「彼」は, 動詞 lè の前に置かれた j と, daŕj の -j の両方に現れている.

・研究に利用する資料の質について 本稿で、「オンライン聖書」を多用したことに疑問を抱かれる方もおられるかもしれない。確かに、内容の偏りからしても、聖書だけでは本格的なコーパス言語学の土台としては不十分だといふべきであろうが、現在のフリウリ語の状況からすると、研究の手始めとしてはそれほど悪い選択ではない。と言うのは、フリウリ語では、聖書翻訳に匹敵するような長さ（分量）でかつ方言的特徴の点でこれほど均質的である（コイナーで書かれているので基本的に中部方言の特徴を呈している）ことを目指したようなテキストは、たぶんまだ存在しないからである。

言語コーパスのプロジェクトがフリウリ語に存在しないわけではないが、フリウリ語の歴史を考えると、従来から存在している諸文書を1つに集めるだけでは、異なった方言的特徴が混在してしまうことは避けられない（そのような混在は、ネイティブ・スピーカーにとっては必ずしも重大な支障をきたさなくても、外国人研究者には混乱のもととなる可能性がある）。フリウリ語研究がこれほど進んだ現在でも、正確な言語状況の把握には、（聞き取り調査を伴う）方言学的研究による確認が不可欠であるゆえんである。

7. 最後に フリウリ語は、地域的な方言差が著しい言語である。1つの事項に関して、何十もの地点での聞き取り調査がなされなければならないことは珍しくない。他方、古くからのコイナー（共通語）の伝統もあり、これを基に現在の標準フリウリ語は成立している。ただ、長い伝統を誇る共通語も、言語のあらゆる点に至るまで厳密な規範を定めているわけではないので、明確な規則がない点に関しては、生きた言語すなわち方言に依拠せざるを得ない。代名詞付き前置詞のケースもそのような例の典型であろう。

少数言語の保護育成に関する法律の成立などによるフリウリ語の社会的地位の変化に伴ない、フリウリ語においても標準語・共通語の重要性は高まり、標準語の整備に関する事業・研究が盛んになってきた。しかし、生きた言語たる方言は、フリウリ語の生命力の源泉であり、そこからまだ多くを汲まなければならないであろう。今なお、フリウリ方言研究の重要性は、強調してもし過ぎることはない。

注

- 1) 理解の補助のため有益だと思われる場合、用語の定義・説明などに、日本語と並べて対応するイタリア語を添えておいた。
- 2) 本稿で引用したフリウリ語の用例の表記は、特に断りがない限り、できるだけ現行のフリウリ語の標準化正書法に準拠するよう努めたが、引用では元の表記を残しておいた。フリウリ語では標準化された正書法の導入の歴史はまだ浅く、最近まで（ある意味では現在でも）、表記法は著者ごとに少しずつ異なるのが当たり前であった。なお、フリウリ語諸方言とコイナー成立の経緯については、拙著「フリウリ語の辞書と言語の標準化・規範化の問題」『ロマンス語研究』vol. 34, 2001年, pp.19-28を参照されたい。
- 3) 「新ピローナ」はフリウリ語をイタリア語で説明した辞書なので、引用符“ ”の中の語句は、イタリア語による説明である。以下、他の箇所でも同様に理解されたい。
- 4) 注2で記したような事情により、本稿では、同一の語彙的要素あるいは形態素が、著者によりまた場合により、少しずつ異なった形で表記されていることがある。例えば、/intor/ が intor-, intòr-, intór-, また

/daur/ が daur-, daùr-, daúr- というようにである。紙面の都合上詳述はできないが、簡単に説明すると、/intor/ と /daur/ に関するこのような表記の相違は、主に、記述のもとにした方言の違い、また長母音・短母音（および両者の交替）を形態音韻論的にどう扱うかについての意見の相違に、由来するものである。

5) このようなケースでは、意味上は、動詞に添えられている与格の人称代名詞 — 用例 (3) では *j*、用例 (4) では *si* — が、*intor* と結びついて、その目的語となっていると一応考えることにする。ただし、与格の代名詞と前置詞（副詞）がどのような仕組みで結びつくのかに関しては、考慮の余地があるであろう。また、そもそも、このような例も含め非本質的前置詞の用法のあるものは副詞とも見なせるという議論が可能であるが、本稿では、そのような副詞と前置詞の区別の問題には深く立ち入らない。

6) 以下、用例において、問題になっている部分は、原文では斜字体、和訳では下線で、示すこととする。なお、用例に添えた和訳は、既存の翻訳からの引用ではなく、筆者がフリウリ語の用例から訳したもの。

7) “Bibie on line” <http://www.glesiefurlane.org/bibie.php>. 聖書全巻のフリウリ語訳を読めるほか、簡単な検索・コンコーダンス作成機能もついている。カトリック教会が正式に認可したフリウリ語訳を使用しているものと思われ、翻訳の質は比較的高いと言えよう。フリウリ語コイナーのテキストなので方言学的には中部方言の特徴を呈している。なお、フリウリ語訳聖書の成立の経緯については、拙著「聖書のフリウリ語訳について」語学研究所論集 8号、東京外国語大学語学研究所編、2003年、pp. 45-65 を参照されたい。

8) フリウリ語の表記法における *j* と *i* の使い分けは、複雑な事情があり簡単には説明できないが、とりあえず、*j* が母音を表わすことも、*i* が半母音・半子音を表わすこともある、ということを念頭に置いておく必要がある。また、著者による違いも小さくなく、本稿でも、*daùrij*, *daúrj* (標準化正書法では *daúrji*) や、*daùriur*, *daúriur*, *daúrjur* (標準化正書法では *daúrjur*) などのように、同じ語がさまざまな表記で現れる。

9) *dauriur*, *daúrjur* に見える *-ur* の前の *-i*, *-j* は、音便により幾つかの形態音韻論的文脈に出現するもの。*-i*, *-j* という表記については注8を参照のこと。

10) 理由は不明だが、同じ著者による辞書 (Faggini 1985) のほうでは、挙げられている代名詞付き前置詞の形は (少なくとも見出し語としては)、*intòrmi*, *intòrti*, *intòrsi*, *daúrj*, *daúrsi*, *daúrjur* だけのようなのである。

11) *-us* の前の *-j* は、音便により幾つかの形態音韻論的文脈に出現するもの。すぐ後に出てくる *intorjus* の *-j* についても同様である。*-j* という表記については注8も参照のこと。

12) 筆者がそれぞれの型をどこの方言で見出したか、地名をイタリア語形で挙げておくと、(1) はフリウリ平野の南部の都市であるパルマノーヴァ *Palmanova* の方言 (中部方言的な特徴を持ちながらも、県庁所在地でフリウリの文化的な中心地でもあるウディネ *Udine* 市の周辺の地域の方言と比べると、いわゆる「フリウリ低地」*La Bassa Friulana* の方言の特徴も持ち、近隣のヴェネト方言からの影響なども示すなど、さまざまな点で異なる特徴を示すことが知られている)、(2) はフリウリ中部方言地域の多くの場所で見られるタイプ、(3) は、一般にはゴリツィア *Gorizia* 県の方言のタイプとして知られているが、筆者はプレマリアッコ *Premariacco* 村のオルサリア *Orsaria* でこれを確認した。オルサリアはウディネ県東部のチヴィダーレ *Cividale* 地区に属する (チヴィダーレの方言も、中部方言的な特徴を持ちながらも、ウディ

ネ市周辺の地域の方言とはさまざまな点で異なっている)。なお、言うまでもなく、(1) (2) (3) いずれのタイプの体系の分布も、ここに挙げた場所に限られているわけではない。

13) 本稿2章で取り上げた *intorsi* の用例は、単純な場所的な概念というよりは、むしろ身体・本体への付属・付着の意味を表わしているものが目立つ。また、*daürsi* の用例も、単純な位置関係「後ろに」の意味というより、そこから派生した、追従「自分の後ろに(連れていく、従えている)」や携帯「携えて」の意味を帯びているように見えなくもない。ただ、偶然そのような例が選ばれた可能性も否定できず、*intorsi*、*daürsi* には単純な場所的な概念を表すような用法が出現しにくいとは、今回の調査では断定できなかった。

14) この「二重使用」は、文頭の句を文の本体の部分において接語形の人称代名詞で承け直す、いわゆる左方転移構文(例えば、*a mi no mi plâs* 「私には気に入らない」のような)とは異なるので注意されたい。

・参考文献 (印刷物 主なもののみ)

- BENINCA', Paola / VANELLI, Laura, *Italiano, veneto, friulano: fenomeni sintattici a confronto*. in *Rivista Italiana di Dialettologia. Scuola società territorio*. 8 (1984), numero unico, pp.165-194
- FAGGIN, Giorgio, 1997, *Grammatica friulana*, Ribis, Campoformido (UD).
- FAGGIN, Giorgio, 1985, *Vocabolario della lingua italiana*, Del Bianco, Udine.
- FRANCESCATO, Giuseppe, 1966, *Dialettologia friulana*, Società Filologica Friulana [以下 SFF と略す], Udine.
- FRAU, Giovanni, 1984, *Friuli*, Pacini editore, Pisa.
- ILIESCU, Maria, 1972, *Le frioulan à partir des dialectes parlés en Roumanie*, Mouton, The Hague – Paris.
- LAMB DIN, Thomas Oden, 1973, *Introduction to Biblical Hebrew*, Darton, Longman & Todd.
- LAMUELA, Xavier, (a cura di), 1987, *La grafie furlane normalizade*, editions de amministrazione provincial di Udin.
- MARCHETTI, Giuseppe, 1952, *Lineamenti di grammatica friulana*, SFF, Udine.
- NAZZI, Zuan, Matalon, 1977, *Marilenghe. Gramatiche furlane*, Institut di studis furlanis, Gurize-Pordenon-Udin.
- PIRONA, Giulio Andrea / CARLETTI, Ercole / CORGNALI, Giovanni Battista, 1992, *Nuovo Pirona. Vocabolario Friulano*, seconda edizione. aggiunte e correzioni riordinate da FRAU, Giovanni, SFF, Udine.
- RIZZOLATTI, Piera, 1981, *Elementi di linguistica friulana*, SFF, Udine.
- 池田修, 1976, 「アラビア語入門」岩波書店.
- ミホール・オシール, 2007, 「アイルランド語文法-コシュ・アーリゲ方言」, 梨本 邦直 責任編集, 京都アイルランド語研究会 翻訳, 研究社.
- 土居敏雄, 1980, 「ケルト語動詞の構造」『月刊言語』vol.9, No. 10, 大修館, pp. 108-117.

・参照した Web サイト (フリウリ語 主なもののみ)

“Bibie on line” <http://www.glesiefurlane.org/bibie.php>

Grant Dizionari Bilengâl Talian Furlan <http://www.cfi2000.net/index.php?loadpage=section&id=68>

Vocabolario italiano - friulano friulano - italiano http://www.friul.net/dizionario_nazzi/index.php